

日本クザーヌス学会および本日のクザーヌス研究者としてなすべきことがたくさん残されているのではないかと考えているところである。また、広く近現代に対する根本的反省の必要が説かれつつある今日、中世と近代の「敷居」に立っていたニコラウス・クザーヌスの思想 (H. Blumenberg) は、その反省的思索に有効な資料を与えてくれる可能性がある。

日本クザーヌス学会は、会員総数約六十名の小さな学会である。しかし小さい学会だけにできる小回りというものがある。それを、これからもいっそう發揮していきたい。滞日経験が長く、本学会の名誉会長でもある P. ネメシエギ上智大学教授は、「pax (平和) と concordantia (和合) を多方面にわたって追求したクザーヌスの思想は、とりわけ日本人に馴染み深いものがあるに違いない」と、繰り返し語っておられるが、クザーヌスに関心をお持ちの方、また、これからあの辺りを研究してみようという方の参加を、日本クザーヌス学会は心から歓迎する。会費は年額 2,000 円であり、事務所は、早稲田大学文学部の小山宙丸教授の研究室 (〒162 東京都新宿区戸山 1・24・1) に置かれている。 (八巻和彦)

東京ボナヴェントゥラ研究所——紹介と現状

本研究所は、1983 年 10 月 2 日、ミュンヘン大学グラーブマン研究所長ヴェルナー・デットロフ教授により創立された。所在地は、聖アントニオ神学院内である。因みに住所と電話番号は、東京都世田谷区瀬田 4-6. tel. 03-700-0652 である。

研究所創立の日、デットロフ教授は、「ボナヴェントゥラとフランシスコの清貧」と題して記念講演を行った。この講演の中に研究所設立の主旨説明がある。それによると、西洋中世思想の研究において、日本ではトマス・アクイナスが極めてよく知られている。しかし同じく十三世紀の代表的スコラ学者であるボナヴェントゥラは殆んど知られていない。だが日本人の霊性を考えると、主知主義的なトマスよりも主意主義的で情操に訴えるところの多いボナヴェントゥラの方がむしろ適合しているように思われる。いずれにせよ、トマスとボナヴェントゥラは共に知られねばならない。なぜなら両者を一緒に把える時、単に一方を知るよりも、はるかに優れた全体像を把握

しうるからである。加うるに将来における仏教とキリスト教の対話を考える時、ボナヴェントゥラに対する理解の深まりは、これを一層深め拡げるに違いない。以上の如く述べて、さらにデットロフ教授は、自身が聞いたロマノ・ガルディーニの言葉として、「未来における仏教とキリスト教の対話は、マルクス主義とキリスト教の論争よりもはるかに重要なものとなるであろう」と付言したのである。

研究所創立以来、本年ですでに十二年の月日を数えるが、その活動は多数の支持者に支えられて順調に進行してきたし、また進行しつつある。毎年春期にセミナーを開催し、秋にシンポジウムを挙行し、年に一回『ボナヴェントゥラ紀要』を公刊している。

セミナーは、三日間にわたりデットロフ教授の講義と討論からなっている。近年に行われたものでは、「真理への道——ボナヴェントゥラとスコトッスの対比」(1990年)、及び「歴史的経過におけるキリスト教の神学的理解」(1991, 1992, 1993, 1994年)、さらに「ヨーロッパ文化に対するキリスト教の意義」(1995年)。特に二番目のものは、聖書、クレメンス、オリゲネス、アウグスティヌス、アンセルムス、トマス・アクィナス、ボナヴェントゥラ、カトリック・テュービンゲン学派にわたり、神学史の総体を四年間にわたって詳述したもので、成果大であったと信ずる。また来年度については、同じくデットロフ教授の *Die Eitelkeit der Welt (vanitas mundi) und das Heil — Die Einleitung Bonaventuras zu seinem Kommentar zum Predigerbuch des Alten Testaments—* と題するセミナーを予定しているのである。

シンポジウムは、毎年共通論題を設け、ボナヴェントゥラなどキリスト教思想を中心とする講師一名ないし二名、仏教・神道・イスラム教に関する講師を一名ないし二名招き、講演と討論の会を開いている。因みにここ数年の共通論題と講師及びその題目は以下の如くである。

1992年、共通論題「道の宗教的意義」

ハンス・メルカー (エアランゲン教育大学教授) 「ボナヴェントゥラにおける道の意義」

上田賢治 (国学院大学教授) 「道と神道」

門脇佳吉 (上智大学教授) 「禅とキリスト教における道」

1993年、共通論題「聖典と解釈」

ハンス・メルカー（前出）「ボナヴェントゥラの聖書解釈の基礎」

湯川武（慶応義塾大学教授）「外面主義と内面主義の相克—イスラームにおける
聖典と解釈—」

森章司（東洋大学教授）「仏教の聖典観」

1994年、共通論題「修道と文化」

ヴェルナー・デットロフ（ミュンヘン大学教授）「中世における修道生活と文化
に関して—特にフランシスコの修道生活と文化に関して—」

川下勝（コンヴェントゥアル・フランシスコ会司祭）「修道生活の起源と文化」

鈴木格禅（駒沢大学教授）「仏教信仰と文化—修道僧が日本に与えた影響—」

以上の題目からも察せられるように、本研究所の活動は、ボナヴェントゥラを多角的な視点から研究すると共に、これに関連して他の中世思想家に及び、さらに仏教・神道・イスラム教などとの対話に目を開いて行われているのが現状である。なお本年十一月五日のシンポジウムは、共通論題を「現代文明に対する宗教の役割」と銘打って、キリスト教・仏教・イスラム教の講師を招いて開かれる予定である。

『ボナヴェントゥラ紀要』は1984年より1994年まで、1990年を休刊したほか連続発行され、すでに十号を数える。その特色は、第一に毎年のシンポジウムの概要を収録していることである。また第二は、ボナヴェントゥラとスコトゥスを中心とする研究論文を多くのせていることである。第三は、十三世紀のフランシスコ会学派を中心とする著作の原典の翻訳を掲載していることである。老大家の味わい深い論考と共に、新進の研究者の注目に値する論文や翻訳も見られることも一特徴といえようか。

最後に記しておきたいのは、聖アントニオ神学院図書館には、デットロフ教授の本研究所宛寄贈図書が収められている。またこれらを加えて当図書館の『フランシスコ関係蔵書目録』が当神学院教授石井健吾神父によって1985年に作製されていることも大きな成果である。

以上に誌した如く、本研究所はフランシスコ会スコラ学を中心とした学界への貢献を第一にしている。またそれと共に東西霊性の交流にも資することを念願としている。その意味で中世哲学会をはじめ諸方からの御援助を頂ければ幸いである。

（坂口昂吉）